



●伝えることから広がる、 わたしの研究の世界●

初めて参加を決めた学会はタイで開催された国際学会でした。そこで私は、自分の研究を「どのように伝えるか」という壁に直面しました。自分にとっては見慣れた専門語や図表も、分野が異なる参加者にとっては未知のものです。わかりやすく、かつ魅力的に伝えるには、どのような言葉を選び、どのような見せ方にすればよいか。そうしたことをひたすら考えながら準備を進めていました。ましてや英語での発表だったので、期待と不安が入り混じるなかでの挑戦でした。しかし、当日には多くの方が関心をもってくださり、活発な意見交換を行うことができました。とても楽しく、今でも鮮明に心に残っています。

この学会を含め、修士1年の間に大小合わせて4つの学会に参加しました。いずれの場合でも、多様な背景を持った多くの方が私の発表に耳を傾けてくださいました。ポスター発表、口頭発表のどちらにおいても、予想もしなかった視点からの質問や、自分では見過ごしていた点への鋭い指摘をいただくこともありました。こうしたやり取りが、自分の研究を別の角度から見つめ直すきっかけになりました。このような経験から、「伝えること」は単に成果を一方的に示すことではなく、対話によって新たな気づきや発見が生まれる大切なプロセスなのだと感じるようになりました。

特に難しいと感じたのは、自分の研究の「面白さ」をどう表現するかという点です。研究に対する自分なりの情熱や興味はあっても、それが相手に伝わらなければ意味がありません。そうしたなかで、自分の研究に興味をもち、「面白い研究ですね」と言葉をかけてくださる方々に出会えたときには、自分の想いが誰かに届いた喜びとともに言葉できないほどのうれしさが込み上げてきました。この経験は、今でも研究を続けるモチベーションに繋がっています。

学会を経験してからは、自分の殻に閉じこもらずに、積極的に人と意見を交換するようになりました。人に話すこと

で自分の考えが整理されたり、思わぬヒントが得られたりすることがあるからです。日常のちょっとした会話や雑談の中にヒントを見つけることや、ご飯を食べながらぼんやり考えていたら、ふとアイデアが浮かぶこともあります。日常のさまざまな場面にヒントが転がっていると感じています。

研究を進めるなかで、私は常に「自分にしかできない研究とは何か」ということを問い続けています。まだまだ手探りですが、新しい視点をもったり、自分の興味や経験を活かしたりしながら、オリジナリティのある研究を目指しています。既存の方法や考え方にとらわれず、自分なりの問いと向き合う姿勢を大切にしたいです。

加えて、特に最近強く意識しているのが、「筋道を立てること」と「広い視野をもつこと」の大切さです。日々の実験と考察の積み重ねを通じて、一貫したストーリーを構築することで、問題に論理的かつ柔軟に向き合えると感じています。また、自分の研究が社会とどのように繋がっているのか、世界の中でどんな意味をもつのかを考えることも、以前より重要に感じるようになりました。国内外の学会や論文にふれるなかで、同じテーマでも国や地域、立場によって問題の捉え方や関心のあり方が異なることに気づかされました。だからこそ、自分の研究を俯瞰して見つめ直す視点を持ち、その位置づけを意識しながら進めていく姿勢が、研究の意義や方向性を見失わないためにも欠かせないと感じています。

また、研究生生活においては、時間の使い方やメンタルの保ち方にも注意を払っています。学生生活の時間は限られており、実験は思い通りに進まないことの方が多いのが現実です。しかし、トライ＆エラーによって計画を立てることに慣れ、時間の感覚もつかめるようになってきました。結果が出ずに落ち込むこともありますが、そうした時期を乗り越えた先に、研究の面白さがあると感じています。一見無駄に思える時間も、それが意味のある過程であり、最終的に深みのある成果につながると信じています。

これからも他者との対話を大切にしながら、自分自身の研究を丁寧に育てていきたいと思っています。「伝えること」と「自分らしさ」の両方を大切にしながら、日々の研究に向き合っていきたいです。多くの学びや成長のきっかけを得られたのは、ご指導くださり、議論の機会をくださる先生方、励まし高め合える同期、共に支え合う研究室の仲間たちのおかげです。研究が思うように進まない日もありますが、支えてくれる人たちの存在が、私にとっての大きな支えであり、私の研究を続ける原動力になっています。感謝の気持ちを忘れず、これからも真摯に、一步ずつ研究と向き合っていきたいと思います。

(岡山大学大学院環境生命自然科学研究科環境生命自然科学専攻
樋本京香)